

グリーンフィールド紅茶園訪問記



教育学部 教授 陣内 雄次

ヌワラエリア地方にあるグリーンフィールド紅茶園 (Greenfield Bio Plantation、以下GBP) を訪問したのは、スリランカ着後4日目の3月10日であった。ヌワラエリア地方は標高1800メートルで、昼と夜の温度差が激しい。その温度差が良質で個性ある紅茶の栽培に適しているという。ハプタレーにあるサルボダヤ本部を9日午前8時頃に発ち、ヌワラエリア地方に到着したのは当日午後4時近くになっていた。車中から垣間見た一面の広大な紅茶園のスケールに圧倒された。高原の空気が清々しい。

3月10日も快晴。まずは茶摘みが行われている茶畑へ向かい、field officerのSarewanarether氏などから話をうかがいつつ、茶摘みの様子を見学した。tea clipper (茶摘み労働者) は全員女性であり、夫など男性は主に草むしりや清掃など茶畑の環境整備の仕事をする。スリランカでは19世紀に大規模な紅茶園が開拓され、紅茶園での労働力としてインドから連れてこられたのがタミール人である。その子孫が今でも重要な働き手である。tea clipperの仕事は午前8時～12時、午後2時～4時の6時間労働。日曜日は休み。一日の賃金は405ルピー (約400円) であり、生活を支えるには十分だという。有機栽培の肥料は牛糞と葉を混ぜてコンポストでつくる。化学肥料などは一切使用しない。

通りかかった Welfare Officer の若い女性も、快く我々のインタビューに応じてくれた。

GBPが設置した女性と子どものためのクリニックや託児所があるなど、労働者の生活環境の改善にも注力していることが分かった。

茶畑での調査を終え、GBPの工場兼

オフィスで factory manager の G.Radnakrishner 氏から話を聞くとともに工場を見学した。有機栽培は1992年に開始。フェアトレードの主な相手先は、ドイツ、南アフリカ、オーストラリア。有機栽培の紅茶は割高であるが、先進諸国などのマーケットから支持されているという。

GBPの茶畑は想像していたよりクリーンであった。全体的な印象としては、有機栽培、フェアトレードということにプライドを持っているように感じた。本学とGBPとの関係を考えて場合、学生たちが現地を見て、感じて、学ぶことは無尽蔵にあると痛感した。ただし、事前学習とオリエンテーションをしっかりと行い、学生たちの問題意識と調査目的を明確にした上で、ということはあるまい。

(スリランカ調査の最終日3月16日、GFBのコロンボ本社にて聞き取り調査を行うことができた。紙幅の関係上この報告は別の機会にしたい。)



tea clipper 達はカメラを向けるとポーズをとってくれた。人なつこい笑みに感謝。(2011年3月10日筆者撮影)